

幼児期からの学びの接続の現状と課題 — 小学校の教師用指導書にみる幼児期の学びの内容から —

Current Status and Issues of the Smooth Learning from Early Childhood Education to Elementary School Education : From the Contents of Early Childhood Learning Described in Elementary School Teacher's Guidebooks

武内 裕 明*

Hiroaki TAKEUCHI*

概 要

本稿では、令和2年度の教育出版の小学校1年生の教師用指導書を対象として、幼児期の学びの内容がどのように現在の学びにつながるものとして描かれているのかを検討した。

教師用指導書に記載された幼児期の経験の多くは、安心感や自信をもたせるため、あるいは動機づけを意図して、生活の連続性として描かれていた。生活科では少数ではあるが明確に「学びの連続性」を踏まえた記述が、音楽科では幼児期と同じ活動の中で発展的な活動に関する記述が行われていたが、学びの接続を意識した記述は全体としてはごく限られていた。また、教師用指導書では指導の必要性を明確にするために幼児期の経験を不足や、均されなければならない学習状況の違いとして描きがちであることから、このような「欠如の記述」ではなく、できることの発展として描く、学びの活用として構想する、などの記述の様式が今後の教師用指導書においては求められることを指摘した。

キーワード：幼児期からの学びの接続 小学校1年生 教師用指導書 幼児期の学びの内容

はじめに

幼児期からの学びの接続は、2005年の中央教育審議会答申「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について（答申）」以降、幼小連携・接続に関する議論で継続的に重視されてきた主要な教育上の論点のひとつである。とはいえ、2008年に改訂された「小学校学習指導要領解説 生活編」では、小1プロブレムを主要な問題として位置づけて何度も言及したうえで、幼児と触れ合う交流活動、他教科との関連を図る指導、合科的な指導などの工夫のされた入学当初のスタートカリキュラムの編成などの改善が行われたことが示されているように、これらの改善は、幼児期からの学びの連続性よりは、学びの総合性を重視した上で、小学校教育への接続で実際に問題となっている課題に対応するために移行期の小学

校への適応に重点が置かれた内容と評価できる内容であった。

その後、2021年7月からの幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会の議論では、「幼保小の架け橋プログラムの実施に向けての手引き（初版）」（2022）が策定され、年長から小学1年生までの2年間にわたる架け橋期のカリキュラム開発が重要な論点となるなど、改めて学びの接続が強調されることとなった。幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会の終了後にも、幼児期からの学びの接続に向けた参考資料として幼児期及び幼保小接続期の教育の理解増進事業の一環で作成され、ベネッセコーポレーションにより取りまとめられた「幼児教育と小学校教育がつながるってどうということ？」（2024）が公開されるなど、幼児期からの学びの接続に向けての取り組みは従来以上に強調されている。

* 弘前大学教育学部

Faculty of Education, Hirosaki University

しかしながら、小学校における幼児期からの学びの接続は、難問とあってよい。例えば、表現力や自己選択する力などの抽象化された能力を重視する形をとるなどによって、幼児期からの学びを接続していると論じ方はしばしば見られる。しかし、こういった力はどの段階でも程度の差があれば発揮可能なものといえ、幼児たちの学んできたことに何をにつないでいくのかはほとんど明確にされていない。即ち、幼児期にどのような学びを想定し、それを何に接続するのかという具体的な像は描かれることがほとんどないのである。「幼児教育と小学校教育がつながるってどういうこと？」(2024) に関して、特殊な教育でなければ実現しないようなものではない幼児期の学びを小学校教諭に向けて紹介する広報的価値は高いものの、小学校でどのように幼児期の学びが活用されるのかに関しては十分に説明されたものとはなっていない。

学びの接続が重視されながら具体的な学びが論じられない背景には、幼児教育の位置づけや関係者の意向も関係している。幼児教育は、幼児が幼児期にふさわしい生活を展開することを通じて行われるものであると位置づけられ、幼児教育関係者は小学校教育の準備教育となることを警戒し、幼児期の学びの内容を記述することに警戒をしている。確かに、幼児期に何を学ぶのかを固定的に考えることは、現行システム上問題があるというだけでなく、先取り教育に向かうリスクをはらむ。しかし、幼児期からの学びの接続を考える場合に、幼児期の学びを具体的に想定することは不可欠である。なぜなら、どのようなことを学んでいるのかが想定できなければ、その学びを接続することは不可能であるからであるし、入学時点でどういったことを知っている児童がいるかが教師に想定できないまま既に知っている内容が繰り返されたり、負荷のほとんどない活動が学習とされたりするならば、その活動に好奇心をもち、真剣に取り組もうと幼児たちが思うとは考えられないからである。例えば、月間絵本などと呼ばれる幼児向けの出版物では、自然や社会などを含めた様々な事象がイラストや写真などを用いて紹介され、様々な物語なども掲載されている。そこでは少なくともルビなどをうつことでカタカナも幼児が読むことを想定して用いられている。一般的な絵本に関しても、年長を対象とした絵本の文章量は、1年生の国語の物語教材の分量を超えるものも珍しくない。これらは、すべての幼児が経験し、習得しているものではない。しかし、小学校への入学時点までに幼児が学んでいる蓋然性の高い内容が1年生の教科書の内容

をはるかに超えていることは、小学校教員の共通の前提とは言い難い。

学びの接続という難問に小学校教師が取り組む際に、指導の構想に大きな影響を与えうるものとして、教科書の教師用指導書が存在する。幼児期の学び、そしてそれをどのように小学校の授業で活用していくかイメージできない場合であっても、単純に授業を構想する場合であっても、教科書に完全に対応している点で、参考にされる資料としてもっとも汎用性が高いのは教師用指導書であるといっていいただろう。教師用指導書を用いて日本の学びの接続が重視された時期以降の幼小連携・接続に関する検討を行っている研究には福元(2018)と定方、轟(2023)の2編の研究論文があるが、いずれも検討対象は生活科の教師用指導書に限定されている。これらの研究の成果として、本研究の関心に関連する幼児期からの学びの接続の具体に関係する知見として共通しているのは、生活科においてすら、幼児期の具体的な学びをどのように接続するのかという観点が限定的にしか示されていないということである。

福元(2018)は、2002年までの教師用指導書までは、幼小の交流は選択肢のひとつとして位置づけられていたが、幼児期の経験を児童の学習につないで幼小のカリキュラムを見通す関心が薄かったこと、2000年代を通じた幼小接続の要請の高まりにより、数は少ないながらも幼児期の活動の名称だけでなく、幼児期の活動からの発展を意図した記述がみられることなどを明らかにしている。具体的な学びの接続を意識した記述としては、幼児期の栽培活動が大人の手伝いや断片的な活動であって継続して育て続ける体験が少ないのに対し、自分で植物を世話し、最後まで育てることをねらいとした授業構想がしめされている。定方、轟(2023)は、2011年の生活科の教師用指導書では、幼児期の経験や学びの想起をトリガーとした接続は提案されていたが、幼児期に培った資質・能力がどのような形で学習の基盤となり、接続され得るのかという点の認識が薄いのに対し、2020年の教師用指導書では幼児期に絵本に親しんだ経験から、絵を見ながら言葉を引き出す活動を想定している例のように、国語科にも関連させつつ、幼児期に培った資質・能力の活用を構想した授業参考例が見られたことを明らかにしている。

これらから想定されるのは、①幼児期からの学びの接続は、現在の教師用指導書でも、その中心として期待される生活科においてすら具体的な構想が限られて

いること、②定方、轟（2023）の示した例などは幼児期に培った能力を活用していることは確かであるとはいえ、彼らの言語活動の連続性から見た場合、絵から言葉を引き出せることが期待されるというのはこの時期の児童の能力への期待水準としては過小評価された能力観である可能性があること、である。

先行研究は学びの接続だけを論点としたものではなく、生活科以外の教師用指導書の内容の検討が行われていないため、他教科ではどのように幼児期の学びの内容が記載されているか明らかにされていない。そこで本研究では、教師用指導書に見る幼児期の学びの内容を参考にしながら、複数教科にわたって幼児期の学びの内容がどのように記載されているかを検討し、幼児期からの学びの接続の現状と課題を検討する。検討に際して、生活科のほか算数科、国語科、音楽科、道徳科などに関しても同一出版社の教師用指導書を参照できることから、本研究では教育出版の令和2年度の1年生の教師用指導書を対象とした。引用した資料は文献に示しているが、ほぼ記述すべき論点のない書写、及び参照したものの引用していない資料は掲載していない。

1. 生活科の教師用指導書にみる幼児期の学びの内容

幼児期からの接続やつなぐといった発想に関する理論的な記述が詳しく行われるのは、生活科の指導書のみである。生活科では、幼児期の経験を想起させるような利用は指導案編などで数多くみられる。また、小学校の入学がゼロスタートではないことは強調されている（総論編、p. 24）。しかし、どういった内容が具体的に繋がっているのかは指導書において明確にされていない。しばしば「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」やスタートカリキュラムに関して論及されるものの、どのような学びを小学校の学びにどのようなつなぐのかに関しては不明確な部分が多い。

幼児期に経験があることや、幼児期の経験を想起することに関する記述は他教科と比べ豊富であり、十分な紙幅が割かれている。これらは新しい生活への安心感を与え、学習を動機づけるものとして考えられているといえる。「園ではどうだった？」と問うことで、園と小学校の違いに気付き、小学校について知りたい、探検したいという意欲を高める（実践事例編、p. 11）ことを意図した記述のほか、園での生活スタイルとの違いをできるだけ少なくし、これまで経験してきたことが小学校でも通用すると自信をもてるようにす

る（実践事例編、p. 6）、「靴箱や手洗いなどは、幼児期にしていたことを思い出させ」及び「幼児期に「遊び」の中で体験したことを思い出して、自信をもって取り組めるようにする」（共に指導案編、p. 12）という記述や同種の記述（朱書編、p. 8）のように、園での生活スタイルとの違いをできるだけ少なくし、これまで経験してきたことが小学校でも通用すると自信をもてるようにする（実践事例編、p. 6）記述が、定方、轟（2023）でも指摘されている学びの想起の典型である。学びの想起の具体例では児童のできることを強調されるが、それは従来の小学校の教えすぎを戒める意図に近い。結果として、学びをつなぎ発展させることにつながる記述は充実していない。

生活科においては、先行研究の指摘同様に、これまでの学びを続く学習につなぐことを意識した記述が存在しているが、具体性があり学びが繋がっていると言える記述は少数である。幼児期と限定されていないが、野菜に詳しくなるために、虫を飼ったときに図鑑を見た経験を参照する例（実践事例編、p. 44）や、アサガオのつるに支柱を立てる必要性があることをこれまでの体験から実感させる例（朱書編、p. 36）など、幼児期の学びが現在の学習に活用される様子が明確に描かれているのは生活科に限られた。

生活科の教師用指導書には幼児期からの学びを意識した記述が他教科と比べ最も充実しているとはいえ、幼児期の経験がどのように学びにつながるのかが不透明な記述も多くみられる。「読み聞かせを聞く、絵をかいたり工作をしたりする、体を動かして表現するなどは、入学前の生活の中で十分経験している」（朱書編、p. 10）、「春の草花で遊んだ経験はあると考えられる。どんなことをしたことがあるかを皆で共有することはとても大切な活動である」（朱書編、p. 50）、「雪や氷での遊びに関する「同じような遊びをする中でも、小学校の生活科の学習では、よりいっそう思考力をはたかせながら取り組むことを意識し、自然のきまりや不思議さについて気付かせたい」（朱書編、p. 112）などの記述は、つながりの不透明な記述の具体例である。幼児期に記載された経験があったであろうことは示唆されるが、その経験が現在の学びへとどのようにつなげられるかが明確ではない。学びのつながりがいまいになるのは、幼児期の経験までは特定しても、その経験を通じて幼児が具体的に学んでいる内容が特定されないことに起因すると考えられる。このような記述では小学校の学びがゼロスタートでないことは示せるが、これまでのどのような学びを何を学ぶことに

どのように活用するのかが明確にできないのである。

その他、生活科特有の幼児期の経験に関する記述としては、成長や変化を考えるために幼児期の経験を振り返る形での活用がある。「水遊び、砂遊びは、幼児の頃から経験していることである。経験を思い出させながら活動し、前の自分と今の自分との違いや成長に気付かせるようにしたい」（朱書編，p. 54）や、「幼児期からの成長，変化を考えさせる」（指導案編，p. 64）のように、現在までの学びを明確にする手段として過去の学びの内容を振り返ることを示しているのは生活科の学びの接続に関する記述の特徴である。

2. 国語科の教師用指導書にみる幼児期の学びの内容

国語科の教師用指導書に関しては、幼児期の学びをということに限定されないものの、経験してきたことを踏まえて次の学びを構想する記述が多くみられることが特徴である。主語、述語の対応した文を書くことをめざした単元での「小学校入学以前の幼児は、家庭や幼稚園・保育所などにおいて、自らを取り巻く環境や主体的に取り組む活動をとおして文字（平仮名）を習得し始める。その中には、友達との手紙のやりとりを行う中で文章を書く幼児も見られるが、系統的な学習をとおして文章を書くのは小学校入学以後の国語の学習においてである」（下，解説・展開編，p. 180）という記述や、漢字の学習に関する「知識のうえでも大人に近づきたい一年生は、入学前から漢字の学習にあこがれている傾向がある」（下，解説・展開編，p. 124）が、学ぶ中で複数の文字の読み方に当惑し大きな壁になることの指摘をはじめ、分ち書きについての「本教科書では、たどり読みになりがちな幼い学習者のために、語のまとまりを意識し、文として読みやすくなるために採用している」（上，解説・展開編，p. 84）という記述、50音についての「今まで無意識に使ってきた言葉が、体系的に整理されていることに驚いたり」（上，解説・展開編，p. 112）という記述など、幼児期の学びを発展させる記述は国語科としての系統的な学びへの移行を意図して描かれることが基本となっている。

経験を踏まえた学びの展開に関しては描かれる一方で、幼児期の学びをどのようにつなぐのかに関しては十分に取り扱われているとはいえない。学んできたことの活用ではなく、できないことであれば、「この期の児童はとにかく話すことばかり意識が集中し、人の話を聞くことは不得手である」（上，解説・展開編，

p. 41）のように描かれることはあるが、これは学びをつなぐイメージとはいえないだろう。経験との関連付けによることにより、幼児期の学びが現在の学びとの連続性を明確にされる一方で、系統的な指導が意識される帰結として、幼児期の経験が想起されるのはその経験を活用するためではなく、学習前にはできないことを明確化して指導につなげるためとなってしまうのである。

また、内容として読むと、幼児期の学びを想定しているのか疑われる記述もある。読書に関する「既に四月に『おはなし たくさん ききたいな』で、読み聞かせの活動を経験している。また、入学以来、担任やボランティアによる読み聞かせが行われている学校もあり、児童の絵本への興味は十分に高まっていることだろう」（上，解説・展開編，p. 96）という記述は、幼児期に絵本への興味を高めていることを否定しているかのように読める文章である。また、おおきなかぶに関しても、「幼稚園や保育園の間に劇化して親しんでいる児童も多くいる。小学校では、文字、文章の読みや登場人物の言葉を想像したり、人物になって表現したりすることとおして、読むことの楽しさを味わわせたい」（上，解説・展開編，p. 212）とあるが、文字や文章の読みはともかく、その他の部分が幼児期の学びからどのように発展しているといえるのかは不明確である。劇をやってきたと児童が多いとするにも関わらず、改めて国語科でも劇化をするに関する必然性も示されておらず、幼児期の学びの先にどういった学びを構想しているのかが疑われる。

過去の経験を想起する言及も、「保育園・幼稚園で読み聞かせをしてもらった作品を思い出す児童もいるだろう」（上，解説・展開編，p. 206）とわずかに存在した。また、経験の想起に近い事例として動機をつなぐ用法も存在していた。漢字の複数の読み方に当惑し大きな壁になることに関して、「知識のうえでも大人に近づきたい一年生は、入学前から漢字の学習にあこがれている傾向がある」（下，解説・展開編，p. 124）というものである。学びの動機を幼児期に求めることは確かに接続の一部ではあるが、これも幼児期に学んだことが接続されているものとは捉え難い。

3. 算数科の教師用指導書にみる幼児期の学びの内容

算数科における入学前の経験の位置づけは、主に二通りの意味づけがなされている。即ち、幼児期の学びは、①算数で用いる理解へと橋渡しされるべき日常

の経験として、②均すべき違いとして描かれるのであり、これは算数科の教師用指導書において比較的一貫し明瞭である。これらは共に、研究編で重点的に描かれる形式である。

①に関しては、日常の経験的理解の限界を指摘し、算数の概念への意向が意図されている。大きさ、形、数などの違いの発見に算数を学ぶきっかけを見出し、それらを表す「子どもの言葉と算数の学習との橋渡しをしていくことが、入門期において重要」(研究編, p. 37)という記述や、「子どもたちは、入学前から遊びをとおして、ものの形や大きさ、位置などについてさまざまな経験をしてきている。しかし、形に対する捉え方は、形の大小や色、位置などが含まれた漠然としたものであることが多い」(研究編, p. 155)という記述、「子どもたちは、日常生活の中で、長さ、かさ、広さといった量を比べる経験をしてきている。しかし、量の多少を感覚的に捉えている場合が多く、量の概念や比較の方法についても明確になっていない」(研究編, p. 209)という記述など、定義属性と非定義属性の混在のように、幼児期までの経験が算数的理解としては限界があることを示したうえで、対象となる特性を厳密に規定する算数の概念への移行が意図されていることに特徴がある。

②に関しては、学びをつなぐという発想とは反対に、子どもたちの間のできることの差を最小にすることを意図して経験の違いが説明される。10までの集合に関しての「この時期の子どもたちは、生活経験や発達段階がさまざまであるので、1つ1つ丁寧に説明しながら理解できるようにすることが大切である」(研究編, p. 42)という記述や、時計に関する「時計のしくみについて、就学前の経験で理解が進んでいる子どももいるが、ここで初めて学ぶ子どもにとっては、やさしい内容ではない」(研究編, p. 77)という記述に見られるように、幼児期に学んできたという側面は重視されず、学んでいる内容に不均衡があることが記述され、学びを活用するためではなく、十分学べていない子どもとのできることの違いを減らすことが意図して記述されている。

一方で、朱書編においては学びの想起の形で就学前の生活経験の具体に言及するが、それをつなぐべき学びとして描いているとは考え難い。「本単元では就学前の生活経験などをもとに、数について知り、身のまわりのものの数量を捉えたり、数字を用いて表したりする活動を行う。子どもたちの素朴な気づきから数との出会いを作り、数に親しみ、身のまわりにある数へ

の関心を高めていけるとよい」(算数, 朱書, p. 40), 「就学前に、「猛獣狩りに行こうよ」というゲームに親しんだ子どももいるだろう」(算数, 朱書, p. 51), 「まちがい探しの活動は、入学する前にも楽しんだことがある子どもも多いだろう」(研究編, p. 37), などでは、幼児期に経験した活動として、あるいは動機づけとして、幼児期の経験を描くものとなっている。しかし、これらの記述は幼児期の学びを活用して現在の学びを深めるというよりも、児童が活動に興味をもつであろうことを期待し、児童が意欲的に取り組むであろう活動として描かれており、学びをいかにつなぐのにかについては触れられていない。幼児期の経験に関する記述があっても、その記述によってどのように学びにつながるかが明記されていないのである。

4. 音楽科の教師用指導書にみる幼児期の学びの内容

音楽科の教師用指導書では、比較的低学年というくくりで児童が理解されており、他教科と比べると学年の内容で教育を縛る発想は弱い。幼児期の経験や学びに触れるのはごく初期が中心となり、経験自体に関しては触れる必然性がほぼない記述が多い。しかしながら、個々の学びの状況を踏まえた指導を構想する点では、音楽科の教師用指導書は学びの接続に意識的であるともいえ、指導編には「幼稚園教育要領解説」の「小学校教育との接続に当たっての留意事項」が示されている。

音楽科の教師用指導書では、単に幼児期の活動を動機づけに用いるのではなく、子どもそれぞれの学んできた内容を把握するために幼児期を参照しようとしていることがうかがえる。こういった発想は今回検討した教師用指導書では音楽科だけに見られる特徴であるため、これは子どもにできることの把握が指導上重要になる実技系の教科としての性質由来と考えられる。具体的には、「幼稚園・保育園で歌ってきた歌を見つける活動により、子どもたちの入学前の音楽体験を指導者が把握することができる。また、家庭や身の回りの大人と歌を探し、歌を教わってくることも考えられる」(指導編, p. 11)とこれまでの経験を想起する活動を授業展開に用いながら、子どもの動機づけよりも指導者が音楽体験を把握することをめざす記述や、「初めて鍵盤ハーモニカと出会う子、幼稚園や保育園で経験のある子…地域の状況や子どもによって、技能的なスタートラインが不ぞろいである可能性があるため、教師側は子どもたち一人一人の状況をつかん

でおく必要がある」(指導編, p. 40) のように, 子どもの経験の把握に関連して幼児期の経験について触れる記述が存在している。

個々の幼児期の音楽体験の把握に努める点は他教科と異なるものの, 幼児期に関して言及しても, 幼児期の学びや, 現在の学びとどのようにつながるのかは明確には記述されない。「幼稚園, 保育園でそうであったように, 歌はごく自然に生活の一部として溶け込んでいます」(研究編, p. 44) のような記述は, 特に子どもの学びをつなぐという観点で捉えることは難しいだろう。ただし, 幼児期に触れることと学習内容を暗黙裡に繋げているとも理解できる記述も確認できる。例えば, 「期待を胸いっぱい膨らませ, 入学してきた1年生。音楽を聴いたらすぐに体が反応する時期と言われますが, 中には緊張感が強く動けない子がみられたり, 幼稚園や保育園での取り組みが様々であったりと, 意外と音楽経験に開きがあるものです。ここでは, 音楽の学習が楽しく活動的であるように配慮し, 子どもたちが拍や速度, 強弱, 曲の気分を感じとりながら, 音楽にひたって, 楽しく表現できるように進めていきましょう。スタートカリキュラムの観点からも, 幼稚園や保育園での学びと関連付けながら, <どんなうたがあるかな>や, わらべうたを扱っていききたいものです」(研究編, p. 30) という記述や, 「もりのくまさん」では, 前半部分でフレーズの追いかけてこを意識させながら表現を楽しみます。入学前に歌ってきた子どもも多い教材と考えられます。声の出し方が雑にならないよう, 聴き合って歌うことを大切にしたいものです」(研究編, p. 100) という記述には, 幼児期のどのような学びをどのように活用するのかは明示されていない。しかし, 前者では, 拍や速度, 強弱, 気分を感じ取って楽しく表現できることが, 後者ではフレーズの追いかけてこで声が雑にならないよう聴き合って歌うことが, それぞれ幼児期に学んできたことの発展として構想されていると読むことのできる内容でもある。これまで学んできた内容であるのか, 新しく学ぶ内容であるのか, という点で区別をして, 新しく学ぶことを重視する発想と比べるなら, 音楽科では既習の教材のある側面を意識して意図的に学ぶという形での学びの接続が構想されている点は特筆に値するといえよう。また, ユニバーサルデザインに関連しての「入学後間もない1年生は, 小学生になったワクワク感と環境が変わったドキドキ感で胸がいっぱいであろう。入学前の音楽経験は児童によってばらばらで, 聴覚過敏があるため音楽に興味を示さ

なかった子や, 楽器を触ったことが一度もない子など, 音楽経験の少ない児童も複数いると考えられる。一方, 幼児教室で楽器を習っていたり, ダンスやバレエに親しんできたりしている児童もいるだろう。音楽の授業のユニバーサルデザインを考えると, どの児童ももっている楽器一つまり声を使って, 強すぎず元気過ぎない自然な発声で歌を楽しむ経験を味わわせたい。…入学前にリズムや音程の難しい歌に慣れ親しんできた子もいると思われるが, 小学校で一度リスタートして自然で無理のない歌い方へとつなげていくことが肝要である。」(研究編, p. 29) という記述も, 歌唱においてこれまでの経験をもとに「強すぎず, 元気過ぎない自然な発声」という学びへとつなげようとしていると理解できる。

これらを踏まえると, 音楽科の教師用指導書は, 歌や楽器の習熟の程度が大きく異なるという実際的な問題から, 幼児期の音楽体験の把握に努めると共に, 同じ教材を用いていることを前提として, 小学校で新たに学ぶべき点を意識した記載がなされているといえる。幼児期に関する言及数自体は取り立てて多いとはいえないが, 教材のどの側面に注目していくのかに注目する形でこれまでの音楽活動よりどの面で学びを進めるのかが明記されている点は, 子どもの学んできた内容から学習へとつなげるという発想とは異なるものの, 幼児期からの学びの接続の在り方の一つとして積極的に評価できる内容となっている。

5. 道徳科の教師用指導書にみる幼児期の学びの内容

道徳科においては, 具体的な幼児期の学びの内容に触れたものは見られない。就学前の状況に触れた数少ない記述でも, 「児童の道徳性や規範意識は, 幼稚園・保育園期におけるさまざまな体験をとおして育まれてきているが, 「道徳科」として学ぶのは初めてとなる」(解説・展開編, p. 28) のように, 幼児期の学びをつなぐ発想は見られない。児童の実態として, 入学後の姿に関しては, できていることや不足点について言及されているが, 明示的に幼児期に学んだ内容, できることなどを示すことがほとんどない。育まれたはずの道徳性や規範意識が学習にどのように生かされるのかに関して, 指導書は参考にできない。

子どもの既に学んでいることがこれから学ぶ内容とどのようにつながるのかに関して, 具体性は少ない。児童の実態として, 入学後の姿に関してはできていることや不足点について言及されているが, 明示的

に幼児期に学んだ内容、できることなどが示されるものとはいえない。

おわりに

本研究を通して、今回検討した教育出版の令和2年度の教師用指導書では、幼児期について触れている記述は、学びの連続性というよりも生活の連続性を中心としていたと評価することができる。生活科では少数ではあるが明確に「学びの連続性」を踏まえた記述が、音楽科では学びをつなぐことを明確に意識してなのかは特定しきれないものの幼児期と同じ活動を発展的な活動として展開することを意図した記述が行われていた。しかし、全体としては令和2年の教師用指導書では学びをつなぐことの参考になる記述に不足している。教師用指導書に記載された幼児期の経験の多くは、主として安心感や自信をもたせるため、あるいは動機づけを意図して、あえていえば生活の連続性として描かれていた。経験の想起において幼児のできることが描かれる場合にも、できることを活用して次の学びを構想するというよりも指導の過剰を防ぐニュアンスが強く、幼児期に言及する目的が学びをつなぐためとは考えにくいものが中心であった。

幼児期の経験に触れるという形式は、道徳の指導書以外には浸透しており、本研究の意図からすると不十分に感じるものの、幼児期の経験に触れるという形式は道徳と書写以外では意識されていることが確認できる。

こういった内容を踏まえた上で、先行研究では教師用指導書の現状がやや過大に評価されていると改めて指摘したい。先行研究は複数の時期の教師用指導書を参照し、幼児期やその学びについて言及されるようになってきたという経時的変化を評価したため、教師用指導書の記述をやや肯定的に評価しすぎており、先行研究であげられたような学びの連続性を意識した記述は存在するのだろうが、ごく僅かでしかないことが描かれない。今回検討した中では、先行研究同様に、生活科では幼児期からの活動の発展を意識した事例が見られたが、その数は幼児期に言及すること自体は数多い生活科においても限られていた。また、生活科以外では音楽科だけが幼児期の学びの発展としての側面を意識していたといえ、生活科以外に検討の範囲を広げた結果として明確にできたのは、学びの接続を意識した記述は教師用指導書においてごく限られたものであるという事実である。

本研究の限界として、幼児期の学びをつなぐことを意識した具体的な記述が見られるかを基準に教師用指導書を評価したため、単元のねらいなどで幼児期を超えた内容を考慮している可能性があり、実際にはより多くの教師用指導書の記載が学びの連続性を踏まえたものであり得ることは確かである。しかし、本研究の結果からは、少なくとも幼児期からの学びを具体的にどのようにつなぐのかが、教師用指導書において意識的に言語化されていないことは明らかである。

本研究の結果は、教師用指導書の記述様式自体に幼児の学んできたことや、児童ができることを具体的に教科の学習に活用する記述が不足している可能性を示唆する。今回の分析を踏まえれば、これまでの国語科や算数科の教師用指導書では、指導する必要性を明確にするために幼児期の経験を不足や、算数科のように均されなければならない学習状況の違いとして描いてきたといえるであろう。幼児期からの学びの発展性を意識していた音楽科においても、その連続はこれまで子どもたちができていないであろう側面への言及であり、学んだことを子どもたちが活動に活かしていくという発想では記載されていなかった。このような「欠如の記述」ではなく、できることの発展として描く、単元を新しく学ぶこととしてではなく学びの活用として構想する、などの記述の様式が、今後の教師用指導書においては求められるのではないだろうか。教師が指導の計画において参考にする重要な資料である教師用指導書において、子どもたちが自分の学んできたことを活かしていく方途を示すような学びの連続性の描き方と内容が一般化するならば、小学校における幼児期からの学びをつなぐ実践をより充実させることが現実的になるであろう。

最後に、これまで批判的に検討を行ってきたものの、幼児期からの連続性に教師用指導書で言及が行われることは意義深いことであり、学びの具体的な内容に言及しないことは接続を考慮しないことと同じではないことは強調しておく。研究の中心から外れるために取り扱ってはいないが、児童の主体的活動を充実させようとする、具体的なものやかかわりで学ぶこと、これまで経験してきた活動と類似した活動を行うこと、合科・関連的指導を意識した総合性を重視していることなど、方法的な側面を通じて、近年の教師用指導書では幼児期の教育からの段差が減じられてきたことは確かである。

なお、本研究の主題から外れるものの、同一出版社内であっても、具体的な合科・関連的指導を内容面ま

で意識した記載は多くなかった。国語と算数で同じイラストが用いられているような特徴的な例は別として、単元が意識される場合にも相互の指導計画が関連して作成されているわけではなく、スタートカリキュラムにある合科・関連的指導を構想するには十分な内容とはいえなかった。このことは、教科ごとに教科書が採択される現状では無理のないことではあるが、教師用指導書内で1年生の指導内容の共有が行われないことは幼児期からの学びをつなぐ教科横断的な指導が十分に構想されない一因ともなると予想され、今後の教師用指導書に期待したい点であることも付記しておく。

文献

- ベネッセコーポレーション「幼児教育と小学校教育がつながるってどういうこと？」2024
- 中央教育審議会答申「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について（答申）」2005
- 福元真由美「生活科教科書の教師用指導書における幼児教育に関する記述の変遷—幼児教育と小学校教育の接続を図る観点に注目して—」『東京学芸大学紀要 総合教育科学系1』69, 2018, pp. 129-139
- 教育出版株式会社編集部『ひろがる言葉 小学国語 一上 教師用指導書 解説・展開編（朗読CD付）』教育出版, 2020
- 教育出版株式会社編集部『ひろがる言葉 小学国語 一下 教師用指導書 解説・展開編（朗読CD付）』教育出版, 2020
- 教育出版株式会社編集部『せいかつ上 みんな なかよし 教師用指導書 指導案編』教育出版, 2020
- 教育出版株式会社編集部『せいかつ上 みんな なかよし 教師用指導書 朱書編』教育出版, 2020
- 教育出版株式会社編集部『せいかつ上 みんな なかよし 教師用指導書 実践事例編』教育出版, 2020
- 教育出版株式会社編集部『せいかつ 教師用指導書 総論編』教育出版, 2020
- 教育出版株式会社編集部『しょうがくどうとく1 はばたこうあすへ 教師用指導書 解説・展開編』教育出版, 2020
- 教育出版株式会社編集部『小学音楽 音楽のおくりもの1 教師用指導書 研究編』教育出版, 2020
- 教育出版株式会社編集部『小学音楽 おんがくのおくりもの1 教師用指導書 指導編』教育出版, 2020
- 教育出版株式会社編集部『しょうがく さんすう1 教師用指導書 朱書編』教育出版, 2020
- 教育出版株式会社編集部『小学算数1 教師用指導書 研究編』教育出版, 2020
- 文部科学省「小学校学習指導要領解説 生活編」2008
- 定方太希, 轟晶晶「幼小接続に向けた「スタートカリキュラム」における指導・支援のあり方の変容に関する考察—生活科の教師用指導書における幼児教育に関する記述を手がかりにして—」早稲田大学教育・総合科学学術院『学術研究（人文科学・社会科学編）』第71号, 2023, pp. 1-11
- 幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会「幼保小の架け橋プログラムの実施に向けての手引き（初版）」2022

謝辞

本研究はJP23K22261の助成を受けたものです。

(2024. 9. 2 受理)